

ブラクールの教育

伝統文化継承と公立校並みの教育内容を

2006年11月初めの陸稲の収穫が終わった頃、ブラクールのフィエスタ(村祭り)写真報告が届きました。夜明け前のたいまつ行列から始まり、燃えさかる炎を囲んで捧げられる長老の祈り、民族楽器の演奏、マロンを自在に使って舞うマノボダンス、チボリダンス。報告する PFP スタッフの感動が伝わってきました。祭りを通して民族文化はしっかり継承されているようです。

一方で、新調するお金がないためもあり、日常生活の中に民族衣装姿をみる機会は減っています。ジュネフェさんの率直な感想(P6)のように、時に来訪者を失望させることがあります。



ブラクール・フィエスタの1コマ

教育現場でも民族の伝統文化への誇りと継承は重要視されていますが、同時に教師たちの関心は、卒業後町にでる子どもたちの戸惑いを減らすことに向けられています。教育内容を公立学校並みにしたいと思っています。

昨年度のクリスマスプレゼントは社会見学費用やビデオ教材購入に当てられました。百聞は一見にしかず。身近なはずの自然破壊も映像により初めて理解できました。これら視聴覚教材の一層の充実とバッテリー・ソーラー充電器、改訂版の教科書、職業科の教材整備で学習効果をあげたいというのが教師・住民の願いです。このニーズに応えるため助成金を申請中です。

ブラクール小運営を支える HANDS 定期支援

会員 33 名の定額寄附(年額 6 千円～24 千円)は、小学校教師 5 名分の給与 42 万円/年に充当され、授業料(月約 80 円)を払えない子どもを含めて 148 名の教育の機会を支えています。

卒業生近況



教師として、姉として

— 寮母ロウエンダ —

キアミで補助教員をした後、教師再教育事業(NIA助成)により念願のカレッジ卒業資格を取得したロウエンダ(左)。現在はミアソン寮でハイスクール奨学生 38

名のよき相談相手になっています。勤勉な先輩の懸命さに寮生もよく応えて、子どもたちの学校での評価は学力・行動とも上々と聞きました。

村に残ることを決めたエリザベス

3月卒業後の半年間、ジョジョに同行して山の巡回診療を手伝っていたエリザベス。ボランティア期間を終えた11月時点では海外就労も選択肢に入れていました。ジョジョの片腕だったリジャが怪我で職場を離れた今、看護助手コース卒のエリザベスは、助産師コース卒の先輩ビーナとともに村に必要な人材です。そんな話をした翌朝「やはり村に残ります」と言ってくれました。定期医療支援から捻出する給与は少額ですが、がんばってほしいものです。

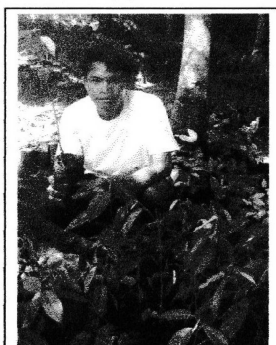
ボニファシオと

「果樹苗育成とモデル農場プロジェクト」

3月にMSUを卒業したボニファシオの専攻は農業ビジネス。小学校高学年から支援してきたHANDSにとっても待ちに待った彼の卒業でした。

ボランティア期間を終えた11月初め、彼から申請書が届きました。マンゴー他5種の果樹苗を種子から育てて、キアミとバサグのモデル農場で栽培技術を教えるという小規模事業です。

ボニファシオにはアグロフォレストリーの実績があるPFPでの研修を勧めたことがありますが、現地NGO間の技術移転はこちらが思うほど簡単ではないようで実現していません。しかし、学生時代を通じて終始誠実で勤勉な彼に賭けてみることにしました。指導者手当も予算化しています。対象地域住民だけでなく、大変貧しい彼の家族への支援になります。



大切な果樹の苗床にて